

---

# ブレイブ・ウィル

カイト

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ブレイブ・ウィル

### 【Zコード】

N7297M

### 【作者名】

カイト

### 【あらすじ】

十五年前、全生命が絶滅の危機に陥った戦争があった。だが義勇軍の活躍によりその戦争は終結した。

そして、これはその義勇軍のツートップの間に生まれた子供の物語である。

## 始まりの夜

「はあ……はあ……」

私は走った。

ただひたすらに。

ただでたらめに。

ただがむしゃらに。

雨が降り注ぐ夜の中で追いかけてくる何かから逃げるために。ボロボロになりながらも絶対に勝てないとわかつてゐるから…逃げることだけを考えて走り続ける。

「い、ここまで来れば……」

そう思つたときだつた。

ドスン

と私を追つっていた化物が空から降つてきたのだ。

「ヒツ……！」

「……………」

音もなく蠢いて迫つて来る化物にどうしよもなく立ち竦んでいたら  
「おうおうおう、その化物さんよお？ 人ん家の前でなにやつて  
んだ？」

男の人人が立つていた。

体つきがよくスタイルもいい人だつたが化物の前には誰も勝てない。

誰も瞬間の内に蹂躪され無残に食われてしまつ。

「ダメッ……逃げて……！」

しかしそう言つた時に化物はもうその人に飛び掛つてゐた。  
その人は何かを構え。

一瞬で勝負がついた。

そして私の意識は闇に落ちていつた……

ん  
ん  
ん  
っ

「あれ？」

気がついたらそこは見知らぬ部屋だつた。

「ん?  
おお、起きたか?」

「あつ！ あなたはつ！」

そう叫んでベッドから立ち上がりかけた時に気づいた。

私は今服を着ていなかつた。

卷之三

沙點

卷之三

そ  
う  
で。

- 15 -

ヒンタ一閃

命の恩人か

命の恩人からただの変態へテンケタウンたつた  
ミハヨバ開二一モニナサギ

「志摩が聞こえぬじかにとあらわにおえでこれと手

それで、肝心の私の命の恩人など一人も完全に来このびてしまつ

ていた。

こんな感じで私達の出会い方はいろいろと酷かつた。

「私の名前は篠山 茂です。そしてこちらが荒尾 戒君なのですが

▪▪▪

さつき私に上着を着せてくれた篠山さんはすごくスタイルがいい

**細身で尚且つ長身**……………どうせ私なんて

そして私を助けてくれた恩人…もとい荒尾 戒は以外にも歳は私と同じくらいだったが、ずっと呆然としていた。

篠山さん曰く。

「戒君は、女の子にぶたれた事なんてありませんからね」と苦笑しながら話してくれたが悪いことをした気分だ。

「そういうばああなたの名前を聞いていませんでしたね。なんて名前なんていふのですか？」

「私ですか？ なぜか育ってくれてた人と名字が違うんですけど富

ノ坂 瑞璃です」

「富ノ坂…！」

「え？ な、なにかいけませんでしたか？」

「いえ、なにもいけない事など在りません」

そういうつで篠山さんは膝を付いた。

「さ、篠山さん？ いつたいどうしたんですか？」

「富ノ坂瑞璃様、これまでの無礼な言動をお許しください」

「え…あの…とりあえず話がまだ理解できないので一から説明してください」

「そうですね…失礼いたしました。」

私がそういうと篠山さんは顔を上げて話してくれた。

「瑞璃様は十五年前に起こったあの戦争のことを知っていますか？」

「私を追っていた化物がこの大陸に攻め入って来た時のことですね」

「はい、あの化物…『ベイメント』によって全生命が絶滅に陥った戦争のことです」

「その事件が私と関係あるんですか？」

「はい、『ベイメント』は未だ誰も知らないような所から攻め入つて来たせいで我々は何の迎撃も出来ませんでした、しかし力がある者を中心とした義勇軍によつて『ベイメント』のリーダーが攻め込んで来た時にそのリーダーを倒すことによつて戦争は終結しました」

「ここまで私はなんの関係性もない話だと思つていたが、次の篠

山さんの一言があまりにも衝撃的で私に関係があった。

「そしてその組織のツートップが瑠璃様のご両親…つまり宮ノ坂琥珀様、翡翠様なのです。いや…正確にはツートップでした」

今、篠山さんはなんて言った？

私の両親が全生命を救つた軍のツートップ？

さすがに信じられない。

いや…信じたくなかった。

「……それは…本当なんですか？」

「ええ…私もその軍にいましたから」

「……私の両親は死んだんですか？」

「死んだところは見ていませんが、琥珀様と翡翠様が瑠璃様を産むために居た病院が崩壊しその跡地に残されていたのは産まれたばかりの瑠璃様だけだったと同僚から聞きました。」

「本来なら私達が責任を持つて面倒を見るべきだったのですがその同僚が病気で死んでしまい彼の家族が自分の親戚に預けたのです、たぶんその方が今まで瑠璃様を育ててくれていた人だと思いますが…心配の種は尽きませんでした」

「しかしこうして無事に会えてよかったです…」

「……篠山さん、ひとつ聞かせて下さい」

「なんでしょうか？」

「私の両親は…お父さんとお母さんは立派な人でしたか？」

「それは…もちろんです」

「そう…ですか…」

「瑠璃様？」

「すいません…ちょっとの間…泣かせてください…」

「えっと…その…わざは泣いてしまってすいませんでした…

…」

「いえいえ、気にしなくていいですよ」

「茂さんはさすがだなあ」

さつきの話の時泣いてしまった私を茂さんは泣き止むまで頭をなでて待つてくれた。

そういうしている内に戒も気を取り戻して、現状に至るわけだが……戒だけは泣いている姿を見られなくてよかつたと心のそこから思つていた。』

「さて、そろそろ本題に入らせてもらいますが瑠璃さん、戒君、よろしいですか?」

「はい」

「もちろんですよー」

篠山さんに様付けで呼ばれるのが嫌というかむずがゆくあつたので普通に呼んでくれるようになんて頼んでみたが、結果は一時間かけて瑠璃さんと呼ばれるところまでだった。

……まあ様よりかはましからよしとしよう。うん、そうしよう。そして立ち直つた戒の方はといふと……

「ねえ、戒?」

「……ッ! オ、おうどうかしたか?」

「本題ついでいい何の話しなんだろ?」

「す、少なくとも俺は知らねえぞ?」

なにやらあのビンタが妙な恐怖心を植えつけてしまつたらしい。こちらが悪いとは思つてない、譲つても五十歩百歩だつたと思つがこんなだとこっちのほうが対応に困つて仕方がない。

「そこ? イチャイチャしてないで話を始めますよ?」

「イチヤイチヤなんとしてないです!—」

くつ……悔しいけど被つてしまつた……。

そんな事を思つている間に篠山さんが話し始めた。

「まず、私と戒君は富ノ坂夫婦と一緒に戦つた篠山 創華と荒尾縛の子供達です」

「そして瑠璃さんは前対戦で英雄となつた富ノ坂夫婦の子供」「『』まで条件がそろつたのならまた力を取り戻してきた『ベイメント』達相手に戦つのもまた一興ではありませんか?」

と篠山さんは微笑みながら私達を見てそう言った。

「よつしゃあ！ やつてやりましょーー！」

「えー？ ちょ、ちょっとまつてくださいーー！」

もちろん私は戦えるはずもないでの戦う気満々の篠山さんと戒を止めに入った。

「えー… どうしたんだよ…」

「だつてあんな化物と戦うわけでしょ？ 篠山さんや戒ならまだしも私が勝てるはずないじゃない」

「いや？ 勝てるぞ？」

「え？」

最初戒の言つている意味がわからなかつたが思考が追いついた。

私が『ベイメント』に勝てる？

そんなことが実際にできるのだろうか…。

私が疑問に思つていると篠山さんが口を開いた。

「瑠璃さん、実は戒君の言つとおりで『ベイメント』に勝てる力を貴女は秘めています」

篠山さん曰く富ノ坂の血の中にはとてつもなく強い力が宿つていて私が今まで使わずに過ごしてきただけらしいのだ。

「琥珀様によるとその力は何かを強く願つことで自由に使えるようになるらしいのですが… 残念ながらそこまでは聞かされてないのです… もうしづけ」ざこません

「いやいや、気にしないでください。でも私武器なんて使つたことないですよ?」

「その点については彼女に武器の設計、開発を頼めば…」

「彼女？」

「もしかして、円のことですか？」

「そうです、瑠璃さんは『仁王コードレーション』を知っていますか？」

「ああ… あの今の社会の発展に欠かせなかつたと言われている…」

「ええ、そここの社長の仁王 工機の娘ですよ」

.....え？

「ええ！？ な、なんで知り合いなんですか！？」

「ああ、それは私と工機が幼馴染だからですよ」

「そんな人と幼馴染なんですか！？」

「知り合いというだけでも相当驚きだといつのにそんな人と幼馴染だなんて…

「あれ？ 幼馴染ってことは歳も同じですね？ 篠山さんは何歳ですか？」

嫌な予感が拭いきれない……まさかとは思つがここまで外見が若々しいなら…

「お恥ずかしながら今年で三十路になつてしまつのですよ」

篠山は苦笑して言つたが私は呆然とするだけだった。

二十九で一大企業の社長をやつている人物の娘に会いにいくだけでなくその社長と幼馴染の人と知り合いにまでなつてしまつている。『ベイメント』が私を襲うようになつてきて育ててくれた宿屋のおばさんに迷惑かけたくない一心で飛び出してきただけなのに…

…はあ…私の平穏な日々は何処に行っちゃたんだろう…。。。

「おい？ 瑠璃？ 聞いてるか？」

「…何よ？」

「いや…急に黙り込んだからどうしたのかなつてな」

「ふ…大丈夫よ、何か大切なものが色々と崩れた以外はね」

「？ まあ大丈夫ならいいんだ」

「とりあえず話を戻しますね？」

私が色々と落ち込んだのから回復したのを見計らつて篠山さんが話を再開し始めた。

「明日あたりに田さんに会いに行つて瑠璃さん用の武器を作つてもらおうと壇つわけです」

「作つてもらうのはもうこの際いいんですけどその田さんはまだここ住んでるんですか？」

「隣町の要塞都市『フォードビルズ』だな」

ちなみにこの大陸のことを軽く説明しておぐと三つの地域に分かれてい、私が育った場所でもあり今いこの地域がさつき名前が出た『フォードヒルズ』を中心に攻めにくく守りやすい地形のおかげで昔から栄えてきた地域が『ヒューリピス』。この地域に住むものは私達みたいなごく普通の体系をしている。もつともあの戦争での幹部格のような特別な力を持つ人もいるらしいが、話を聞く限り今はまだ私も含めて篠山さんと戒の三人しか知らない。

次は天空都市『カプワ・ラング』で歴史的な学者が領主としてやつて来た地域が『スクルニティ』だ。この地域で栄えた人たちには先天的に翼が生えており基本的には学者肌の人間が多いのが特徴だ。そして山岳都市『ストラルフ』に住むドワーフとドワーフに作られたゴーレムが主な種族である地域が『アースゲイル』。技術は三地域の中でどこにも引けを取らないが今まで聞いた話によるとドワーフは人との協調性がなく慣れてしまった人でないとその地域に住むのは辛いそうだ。

「では、明日の早朝には出発したいと思いますので、今日はゆっくり休んでください。」

「わかりました」

「了解です」

私達にそういうと篠山さんは電話を取り出してどこかへかけ始めた。

『もしもし、円さんですか？ 変わらずお元気な様で何よりです』などと言つてるあたりからやはり幼馴染の娘なだけあつてやはり仲も良いんだなあと思つてると不意に方をつつかれた。

私が疑問に思つて振り返ると戒が氣まずそうな顔で頭を搔いていた。

「ああ……なんだ？ その、さつきは悪かったな」

ここで服の事に関する謝罪が来るとは思つてなかつたので私は面

食らつたよつた態度になりながらも言葉を返した。

「あ……いや、私もあれはいけなかつたからつて思い始めてたんだ  
けど……」

「いや、いくら服がボロボロだつたとしてもせめて何か別のものを着せてやるべきだった……ホントわりいな」

「まあで言って戒がうな睡れてしまつた。んー……いやら気が動転してたとはいえやっぱあれはやつすきだつたかー……と思つた私

「？」

「仲直りの握手、つてどこじやダメかな？」

戒が不思議そうに見てたので私が説明すると一転したように顔を輝かせた。

戒が私の手を取ろうとして近づいて来た時に戒がなぜか何もない

「アーティスト」

「え？」

むにゆ

その手は私の胸へと吸い込まれていった。

卷之三

沈默

沈默

そして。

「づぶつー。

じつやうゆうじつは遠い道につなげだつた。

昨日の夜、あんなことがあったが私達は今『フォーブビルズ』に向かう列車の中にいる。……しつかしあの後戒を元に戻すの大変だつたなあ……。

そして大企業の娘に会いに行くわけだから私は不安が一杯の中この列車に乗っているのに彼女のことをしていく「人はどうど……」。

「ねえ茂さん？　たしか六時間ぐらいかかりましたよね？」

「そうですね、正確にはもう少しかかると思いますが」

「まじッすか、じゃあ俺寝ますわ」

「戒君が寝るのでしたらそうですね……私は展望台に行つて外の景色を見てこようと思いますが瑠璃さんはどうしますか？」

すつごいリラックスしていた!!

まあ会つたことあるから緊張しろって方が難しいのかもしないけどこんな緊張してる私が馬鹿みたいじゃない……。

普段住んでいる世界があまりに違うことにショックを受けつつも私はなんとか返事をした。

「私はせっかくなので初めて乗った列車の中を回つてみたいと思います」

「そうですか、ではくれぐれもお気をつけて行動してくださいね」「わかりました」

いつもして私は戒と篠山さんと別れてから一人列車の中を回つている。

初めて乗った列車だからか見るもの全てが新しく楽しかったが同時にいか物足りなさも覚えていた。

たぶんそれは……話し相手がないことだった。

でも展望台に出るのは怖いし戒は寝てるしどうしようかなあ……。

などと考へながら歩こういたら不意に服の裾が引っ張られた。

「……？」

私が疑問に思つて振り向くとそこには小さな女の子がいた。

「…………」

その女の子はなにを思つているのか私の服の裾を掴んだまま俯いていた。

「ん？ どうかしたの？」

視線の高さを同じにするためにしゃがんで聞いてみた。  
だが視線を合わせてみて一つわかった……この子今にも泣きやうだ！！

「……ぐすっ……むか……うわあああああああん！！  
そして危惧していいたこと……泣き出してしまった！」

私は必死に落ち着かせようとしたが幼い子供なのでややした事もない私が落ち着かせようとした所で落ち着くはずもなく……。

「おかあさん！ うわああああああん！！」

「一回落ちついこ？ ね？ お願ひだよーーーー！」

空しく私の声が響くだけだった。

長い時間をかけなんとか落ち着かせれたのだが、それでもまだ少し泣いていて話を聽ける状態ではなかつたのでう少しゆっくりしてようやく落ち着いてきて今から事情を聽くところだ。

「えつと？ まず名前はなんて言つの？」

「わたしのなまえはねえ、ねむろりおんだよ」

ねむろりおんだ……どう漢字で書くんだら？……やっぱり検討も付かない。

でも私も人のことを言えないけど珍しい名字だなあ。

それでつおんちゃん、もしかしてお母さんとはぐれりつたの？

「うん……」

「そつか……じゃあ一緒に探しに行こつか？」

「うん！」

りおんちゃんを安心させるためにやつこつ探し始めたがこの列車での人探しは簡単じゃない……いや、むしろ難しいとしか言えなかつた。

なにせ車両数が二十両もあるのだ。

しかも篠山さんが言つには基本的に満員に近いらしい、今日も例に漏れずぎゅうぎゅう詰めだった。

せりにしおんちゃんと出会つた場所が十両目……つまり真ん中のスタートだつた。

「さて、どうちこ行ひ……」

まあ考えた所で何処に居るのかもわからない上にどうちこ行って

も逆方向に戻らないといけないからどうみち同じなんだけど。

「どうしようかな、ん? りおんちゃんビビったの?..」

「うつちこいくの

そう言つとりおんちゃんはとてとてと歩こつて行つてしまつた。

子供じいといふかなんといつか……自由に生きてるなあ。

「あー、ちょっと!..」

そうしてりおんちゃんが先に行きその後を私が歩くといつよくわ

からない並びで一番設備が貧相な車両まで行つたのだが。

「見つからなかつたね」

「うん……」

「気を取り直して反対側に行ひてみよっか」

「うん!..」

そうして私とりおんちゃんを歩き出したけどなぜかりおんちゃんが急に動きを止めた。

「りおんちゃん?..」

「なんかへんなおどがする

「…………ホントだ」

りおんちゃんに言われて私もようやく気がついた。  
なにかが軋むような音が微かに聞こえるのだ。

他の乗客たちも気がついたみたいで辺りを見回したり、顔を見合

わせている。

上から音がするから確認しようと思ったのか窓際の席にいた人が窓を開けて上を覗き込んでいて、

ビチャ。と音がした。

なにかと思って私は音をした方を向いて……絶句した。

そこには辺りに撒き散らされた血と無残にも首から上を食いちぎられた人と……『ベイメント』がいた。

「……ッ！ りおんちゃん！」

「わ！ わ！ おねえちゃんどうしたの！？」

「いいから早く…」

私は考えるよりも早くおんちゃんの手を取つて駆け出した。

私達は元の道を戻るうとしてる途中だったのと車両からはなんとか逃げられたが後ろを振り向くとたつた一匹の『ベイメント』によつてその車両の人はほぼ全員食いちぎられていて元は白かつた壁や床が真つ赤に染まっていた。

戒と合流することができればこの状況でも大丈夫だ……だから一刻も早く……。

だがそんな事を考えながら走つていて矢先にりおんちゃんが転んでしまつた。

「……ッ！ りおんちゃん！…」

私はりおんちゃんを起き上がらせようとしだけどいつの間にか『ベイメント』が目の前にいた。

逃げるのが間に合わないと思ったから鈴ちゃんを守るようにな『ベイメント』に背中を向けて床に倒れこんで来るべくに痛みを覚悟していくけど……いつまでたつてもその痛みは訪れなかつた。不思議に思つて顔を上げるとそこには、

「なんとか無事みたいだな」

「……はあ……ま、おかげさまでね……って他の車両は大丈夫なの

！？」

「ん？ ああ、大丈夫だろ。この『ベイメント』は基本十、二十の

群れで行動するんだが一体しか追つてきてないだろ?」

「うん、そうだけど」

「なら展望台にいた茂さんが異変に気づいて全部打ち落としにかかるてるはずだぜ」

まあ、もうすぐ終わるだらうから待つてろよ。と戒が付け加えてからそう立たない内に窓の外から奇妙な鳴き声が聞こえなくなつた。

そこから先は列車に救助隊が来てまだ少しでも息のある人を助けてたりりおんちゃんの親を見つけて別れを告げたりしてから篠山さんと合流して『フォードビルズ』に向かつて出発した。

そして本来の到着時間より一時間ほど遅くなつたが今、円さんが住んでいるという『フォードビルズ』の最下層の貧困エリアの入り口にいた。

「なんで円さんは社長の娘なのにこんな所に住んでるんですか?」

「ああ、あいつのことですからたぶんあの理由だと思いますが……それは本人に聞いたほうが早いでしょうね」

「そうですか、わかりました」

「おい、とつととあいつの家に行こうぜ」

「そうですね、では付いてくださいね」

「はい」

「そうして歩き始めたとき

「きやつ!」

「いつてえ……」

後ろから少年がぶつかってさらに転んでしまつていた。

「大丈夫?」

私はその少年に手を差し伸べたがその少年は私の手を振り払い、走り去つてしまつた。

「あ! この野郎! まちやがれ!」

その時なぜか戒がいきなりその少年を追いかけ始めた。

私は事情が飲み込めなかつたものの篠山さんに戒を追う事を伝え

て走り出し、少ししてから戒に追いついた。

「急に走り出したの？」

「あの野郎スリだよ！」

「え？ あんな子供が！？」

そう話している間も足を緩めずに走り続けてあと少しで戒の手が

少年に届きそうな……その時。

「いりああああああああああああああ……」

ドスン。

と轟音を立て、砂煙を巻き上げて私達の前に落ちてきた。  
そしてその砂煙が晴れ、その中から現れたのは……。

「なに人様からスリなんてしどんねん自分！」

「ロボットーー。」

全長三メートルはあるつかと言つほどの田大な鋼鉄のロボットと  
その背中にしがみついていた女の子だった。

「お、お姉ちゃん……」

「ほりー はよ、返しにや！ で、ちやんと謝るんやで？」

「うん……」

私からスリをした男の子は「めんなさい」と言つてから去つてい  
った。

「これにて一件落着！ やな！」

そしてしがみついていた女の子がそんなことを言つていたが、私は訳がわからなくてただ呆然とするだけだった。

そこに篠山さんが来て、

「瑠璃さん、戒君、ここに居ましたか……と、田さんも一緒にですか？」

「え！ 田さんってこんな女の子だったんですねか！？」

「お前いつたい田がどんな奴だと思つてたんだよ……」

「篠山さんのがん付けするぐらいだから少なくとも私と同じくらい  
かと……」

そんな話をしている間に私達に気づいたのか田さんが近づいてきた。

「おお！ 久しぶりやな！ 茂はん！ 戒はん！ で、こいつが……」

……瑠璃はん?」

「あ、うん。そうだけだ」

「ふーん……テストや……」

「え? ええ! ?」

「まあ、名前は知ってるやね! だからいつのひとをなれて呼

ぶつもりや?」

ちなみに率直な気持ちで「いつのやで~と田ちゃんは付け足したが  
なんていうかも?」この身體を見たときから……。

「えつと、田ちゃんこ」

「合格やー」

「ホントー?」

「いやあ……瑠璃はん話がわかつるやないか! ほんま、うちの  
周りにはちやんと呼んでくれる人がおらんくてなあ」

「えー? なんでこんな可愛いのにちやんじやないの?」

「やう? うちもそれが疑問でなあ……」

「……俺らがちやんと呼ばないのが悪いんですけどね?」

「……まあ、少なくとも僕にはわかりません」

そんなことなの話で私と田ちゃんが盛り上がりながら約一時間後  
ぐらごの頃に。

「さて、そろそろ田ちゃんの家に行きませんか?」

「ん、そやな」

「ほーならトクナガの背に乗つて行くか」

「そんなことできるの?」

「うのトクナガを舐めたらあかんで……」

「つてちよつと待てよ……」

「どうしたの?」

「なんで俺だけハブケなんだよー」

どうやら戒は自分だけトクナガの背に乗つていけない事を怒つて

るらしいが、さすがに理由はわからなかつたので田ちゃんの言葉を

待つて、そして田ちゃんはわもなんでもないよつて言つた。

「定員オーバーや」

「嘘付けって！　おい！」

「よつしゃあ！　いくで！」

戒はまだ何か言つていたようだが田ちゃんは気にせずそのままトクナガを起動させジェットと足のばねを最大限に利用して飛び上がつた。

そして建物の間から出た瞬間、

「うわあ……」

私は歓喜の声を上げた。

上空に出たときには圧倒的に青い空。私はこの光景にただ啞然とするばかりだった。

「ん？　ああ！　瑠璃はん口閉じいやー　舌噛むでー？」

「え？」

が、喜べたのは一瞬でトクナガは上に飛んだ、いや……跳んだのだから落ちるのは当然のこととで口を開けて感動していた私は田ちゃんの注意も空しく、私は舌を噛んだ。

「うう……こはこよ……」

「大丈夫ですか？」

「はい……まあそれなりには」

「ならよこのですが」

「ごめんな……瑠璃はん……つちが最初に言わへんかつたせいや……」

…

「気にしないでって、ちょっと痛いぐらいだから」

「で？　武器のことはもう聞いたのか？」

「武器？」

その時私達が着いてからそう経たずして来た戒が聞いたが、まだ言つてないので田ちゃんは疑問顔だ。

「ええ、私達で『ベイメント』と戦おつところのことで瑠璃さん用の武器を作つて欲しいのですよ。」

篠山さんがそういつた瞬間円ちゃんの顔が驚愕のものに変わった。「はー? たかが三人で『ベイメント』に挑むつもりもつもりなん? 無茶もいいとこやで! ?」

「いいえ、三人ではありませんよ。十五年前の知り合いで当てに各地を回つて協力を頼みますしそれに」「篠山さんはそこで一円言葉を区切り円ちゃんを正面に見据えて言った。

「少なくとも円さんは協力してくれるでしょう?」

その言葉を聴いた瞬間に円ちゃんは困ったような顔をして、なにかを考え込んで、最後に呆れたような顔をして言った。

「…………はあ…………ま、あんたらみたいなんをほおつとおけへんしな」

「それじやあ!」

「ええで、うちも手伝つたる…………まあ瑠璃はんと一緒に居たいしな……」「

「ん? 円ちゃんにか言つた?」

「い、いや! なんもあらへんで! ?」

「素直じやねえ奴……」

「うつさいわ! !」

戒には聞こえていたみたいで戒から聞いつとしたのだがどうしても円ちゃんが許してくれなかつた。

いつたいなんて言つたんだろう?

円ちゃんも旅に一緒に来てくれることが決まってから円ちゃんはすぐに私の武器製作に取り掛かつてくれたのだけど私は武器みたいな使つたことないんだけど大丈夫かな? まあ、円ちゃんは任せつて言つたから任せよ。

そして、篠山さんに武器製作は時間が掛かるから先に寝てくれだ

さこといつて私と戒は今寝室にいるのだが、

「ちよつと戒！ そんなくつつかないでよー。」

「俺だつてこんな貧相な体にへつつきたくないねえよ。」

「なんて失礼な！ 私だつてこつ……寄せて上げれば……やめよひ、空しくなつちやつた……。」

なんか空しくなつたら眠くなつてきちゃつたなあ……寝よう、やうじよひ

「なあ瑠璃？」

「どうしたの？ 戒？」

少し眠いけどさすがに無視するのもアレなので少し話を続けることにした。

けど、こつたいなんなんだうつ。

「お前、これからは戦いの日々になつてこくが怖くないのか？」

「…………怖いよ」

「こんなことで嘘をついても仕方ないし、なにより戒が心配してくれたことが……嬉しかった。

「そうか」

「ねえ戒、私どうしたらいいのかな？」

「お前は戦う力を持つている」

「そうだよね……」

「だが、最初は戦いに慣れることも出来ないだらうし怖こと怖いわ。だから」

私が予想外の言葉に驚いてると戒は一団言葉を区切り、

「そのときは俺に言え、必ず守つてやる」

「…………うん。つと、それじゃ私もう眠いから寝るわ」

「ああ、お休み」

私は一刻も話しきり上げたかった。

だつて、恥ずかしきりおかしくなりそうなんだもん……。

昨日恥ずかしくてあまり寝れなかつた私は朝早く起きてソビング

に行くと篠山さんが料理を作っていた。

「おはよっ」といいます。朝早いんですね

「おはよっ」といいます、実は寝てないだけなんですよ

「やつなんですか？ それなら寝てきてきた方がいいですよ？」

「うーん……ではお言葉に甘えさせてもらいましょうかね。それで

は料理お願いしますね」

「…………え？ あっ……はい……」

私に背を向け円ちゃんが武器を作るために入つていった部屋に入つていく。

取り残された私は、

「…………どうしよう

いつも宿屋のおばさんがすごく美味しい料理を作ってくれるから今まで一度も作ったことがないんだけど……。  
でも篠山さんが頼つてくれたんだ！ がんばりつー。

「で、この惨状か……」

「…………ごめん」

まあ、意気込みだけあっても腕がないから結果としては、私が作った料理は全滅、あまつさえ油の入れすぎで火事になりそうなほどだった。

戒が起きてこなかつたら今頃……。

そう思つとびっとする話だつた。

「ま、今から俺が作るから十分したら来るようになつに篠山さん達に言つてきてくれないか？」

「え？ 戒つて料理できたの？」

「少なくともお前よりかはな」

「うう……なんかむかつく」

「ほら、とつとと呼びにいつて来い」

「はいはい……」

なんかなあ……これから私も料理の練習しよつかな。

そんなことを思いつつ篠山さんと円ちゃんがいる部屋の前に行く。  
「篠山さん、円ちゃん、十分後ぐらいに出来上がるので来てください」

「わかりました、私も円さんが元に戻るまで待つてないといけませんしね」

「では、十分後に」

そういうて私は戒の所に戻つていったけど円ちゃんが元に戻るつてどうこいつ意味だろ?..

皿でご飯を食べ終わった後、円ちゃんが私に話しかけてきた。

「なあ瑠璃はん、買い物に行かへん?」

「買い物?」

「そ、つこせつき戒はんから残り食材が少ない」とを指摘されてなあ、せつかくやしと思つてな

「うーん……まあ円ちゃんと一緒に行くんだつたら楽しいだらうからいいよ

「そか、ほな行くで!」

「うふ、じゃ戒、篠山さん、行つてきます!」

私は円ちゃんと食材を買いに行つたりそこに行く途中で見つけた服屋やアクセサリー屋で恥ずかしがる円ちゃんを着飾らせたりして今から帰るところだつた。

しかしあの時、着替えた円ちゃんはかわいかつたなあ……。

そんなことを考え浮かれていたのだけど、その浮かれは次の瞬間吹き飛んだ。

地面から影のよう『ベイメント』が現れたのだ。

「……ッ! 瑠璃はん!」

「うふ!」

私達は距離を取りつつ話す。

「どうする?」

「どうにかこの場をえり切れば武器を取り行けるんやけどなあ……」

「だよね……どうしようか……」

どうやって切り抜けるかを一人で考えてると、

シコタ！と私達の前に私達の前に何かが降り立つた。

そしてその降り立つた何か……白いスーツを着た男の人気がこちらにゅっくと振り向き、

「円！私の可愛い円よ！なぜこんな所で『ベイメント』と対峙しているんだ！危ないじゃないか！円の綺麗な綺麗な珠の肌に傷ができるたらどうするつもりなんだ！…」

「うつさいわボケ！」

円ちゃんのハイキックが決まり崩れ落ちる白いスーツの人……いつたいなんなんだこの人……。

「まったく、瑠璃はんもあるし『ベイメント』と対峙してるときにこんなことしてるんやないで……」

「瑠璃……だと……」

「あ、はい、私ですけど」

「おお！なんと美しい！先ほどは見苦しいところを見せて大変申し訳ありませんでした」

「い、いえ……あまり気にしてませんけど……」

「なんと！私のあのような場面を見ても許すその心はまさに玉瑠璃の様に澄んでいて、その肌はどんな宝石にも負けないぐらに美しい……」

話を聞きながらどうしようかと思つていたとき、その人の背後から『ベイメント』が飛び掛つた。

しかしその人に凶刃が届くことはなく飛び掛けた『ベイメント』は影となつて消えた。

「まったく、レディを口説いている最中に邪魔をするとは無粋な連中ですね……しかし、そろそろ時間ですか」

その人が何かを投げる動作をすると『ベイメント』が次々に一匹、

「匹と死んでいく。

そして私達に振り返り、

「さあ円! こゝは私が受け持ちますのであなたは武器を取りに行きなさい!」

「わかつたで!」

円ちゃんは私の手をとつて走り出した。

「ちょっと円ちゃん! あの人置いてつて大丈夫なの?」

「大丈夫、やつてうちの父さんやもん!」

「ふつ……行きましたか……さて、また口説くためには先にこいつらを片付けないとけませんね」

そういうて白スーツの男、仁王 工機は自分の手に無数の投げナイフを取り出して手に広げ、自分の後ろに向かつて手を振り、「茂、サポートは頼みましたよ」

ここから離れた場所でスナイパーライフルを構えているだろう幼馴染に対し独り言をいい、「覚悟してください!」

工機は投げナイフを投げ『ベイメント』との戦いが始まった。

私達が円ちゃんの家にだぞり着くと玄関前には戒の姿があつた。

「ん? おお戻ったか。ここは俺に任せて早く武器とつてこいよ」

「恩に着るで! さ、瑠璃はんこつちや」

円ちゃんに付いていき部屋の中に入る。

「んで、これが瑠璃はんの武器や!」

「これが……私の武器……」

円ちゃんから渡された私の武器、それは『』と短剣だつた。

私に説明してくれた事の要点をまとめるとこの『』は富ノ坂が代代持つてはいるはずの力を込めると特殊な力を發揮するらしいがまだ私はその力が覚醒してないから使えないとのことだった。

ただ一つだけ篠山さんに富ノ坂の力の話を聞いたときから疑問に

思つていたことがある。

「ねえ、田ちゃん。富ノ坂の力つていつたいなんなの？」

「それは……」

田ちゃんが口を開き言い始めようとした時、外から激しい戦つているような音が聞こえてきた。

「瑠璃はん！ その武器持つて戒はんの手助けに行くで！」

「うん！」

私はわざりきまで説明を受けていた『』を持ち短剣を腰に挿して外に出て行つた。

外は思つたとおりに戦闘中でぞつと敵の数は一十体ぐらいいた。

「戒！」

「瑠璃！ やれるか？」

「大丈夫！ 任せて！」

「あまり気負いすぎるのはよー！」

「わかつた！」

しかし初めての戦いの上に狭い路地での乱戦だったので私は隙をついて射つて三体倒したところで完全に疲れ果てていた。

「はあ……はあ……」

私は一度立ち止まり大きく呼吸をして息を整えようとした。

しかしそんな隙を見逃してくれるはずもなく、これ幸いとばかりに飛び掛ってきた。

「クツ……！」

私は転がるようにしてなんとかかわしたが、すぐに次の攻撃が来るだろうと立ち上がり飛び掛ってきた『ベイメント』を見据えたが私に飛び掛り避けられたため勢い余つて四つん這いになつたまま止まつていた。

なぜ止まつているのかわからないまま呆然としていると、

「我、生きるは人の為」

どこからか声が響いて、

「我、殺すは主の為」

その声はだんだんと近づいてきて、

「我、滅すは國の為」

その声の方向には、

「なら汝は何が為に生きる」

戒がいた。

「生きる価値無きその命、死を持つて償うがよい！」

そしてそのままキロチンを振り下ろし『ベイメント』は真っ一つに切断された。

「…………ふう…………」

私は戦いが終わって緊張感から開放されてへたり込んだ。

「大丈夫か？」

戒が私に手を差し伸べてくる。

「うん、ありがと」

私はその手を取り立ち上がった。

「そういえばさっきのつていつたいなんなの？」

「ん？ ああ、アレが俺の代代引き継がれている力……ま、端的に言えば敵を五秒だけ金縛り状態にするつてとこだな」

「へえ……つてことは篠山さんや円ちゃんにもそんな感じの力つてあるの？」

「まあ、ただ円の力は厳密には工機さんの力と違うがな。」

「そりなんだ……そりいえば円ちゃんは？」

「ん？ ああ、そりいえばいねえな。どこに行つたんだ？」

私と戒は辺りを見回してみるが円ちゃんの姿は見つからない。心配になつて探しに行こうとしたその時、

『おう、坊主共無事だつたか？』

突然響いたひどく野太い声に私達は顔を見合わせる。

そのとき円ちゃんがトクナガと一緒に上から降りてきた。

「おーい！ 瑞璃はん！ 戒はん！」

「あ！ 円ちゃん！」

私達は円ちゃんに駆け寄つた。

「円ちゃん、どこに行つてたの？」

「ん？　トクナガと一緒にこの家を守つとたで？」

「どうでだよ……」

「屋根の上や」

「…………」

まつたく気づかなかつた……。  
確かに円ちゃんの家は瓦とかじやなくてビルの屋上みたいな感じ  
だからわからなくもないが……。

「それでな？　瑠璃はん、戒はん？」

「ん？　どうしたの？」

「トクナガがせつかく心配してくれとんのに無視は酷いんとひやう  
かな？」

「…………」

「はああああああああ！？　え！？　はああああああああ！？」

『おいおい、そんなに驚く』とか？』

トクナガ？　は呆れたような声を出すが私達は驚きっぱなしだった。  
「え！？　だつて円、お前トクナガはロボットつて

「うんうん、円ちゃんそう言つてたじやない！」

しかし私達がそこまで言つたところで円ちゃんは腰に手を当て胸  
を大いに張つて、  
「やからつちのトクナガはただのロボットやないつてゆうつたやんか  
！――」

『つて、伝わつてねえ時点で駄目だらうが！』

ビシッとトクナガは円ちゃんにチヨップを入れ円ちゃんは痛かつ  
たのか頭を押さえてうずくまつたが私達はそんな光景にただ呆然と  
立ち尽くすだけだった。

一方街に残り戦つていた工機と茂はといつと、

「舞い飛べ我がナイフよ！　敵の体を切り刻め！――」

工機がそういうと同時に工機の回りに歯車の形になるように計算

しつくされて投げられたナイフが周りを飛び交い『ベイメント』の群れを切り刻んでいった。

「ふう……こんなもんですかね。さて麗しい私の円と瑠璃さんはどこにいるんでしょうか！」

そういうつてスキップをしながら進み始めた工機だつたがピタツと足を止め振り返る。

「巨大種ですか……久しぶりに見ましたね……」

だが工機は巨大種を一警すると歩きを再開させる。

「ただ、これはあなたにとって格好的でしょ？？」

そういうか言わないかのところで、

タンッ……タンッ……タンッ……。

と渴いた銃声が響き巨大種の頭に三つ穴が開いた。

そして間髪入れずにミサイルが腹に直撃し、無数の弾丸によって手足を削がれていき頭の上に何かが乗り、

「チヨックメイトです」

茂はショットガンの引き金を引いた。

そのまま茂るは崩れ落ちる巨大種の上から飛び降りたが何かを踏みつけた。

まあそれは工機の頭だつたのだが茂は気にせずに聞く。

「こんな所で何をしているんですか？」

「はははっ……わかつてるとは重いますがあなたの撃つたミサイルの爆風のせいで吹き飛んで立ち上がるうとしたところであなたに上から頭を踏みつけられたのですよ」

「ああ……そういえばそんなこともありましたね」

「とりあえず私の頭の上からどうしてくれませんか？」

「なんですか？　あなたのマゾでしょうか？」

「わかつていましたがあなたは昔からサドでしたけどね……ただ、

私はマゾでも男に踏まれて喜ぶマゾではないのです……」

「そうですか、そうですか」

「痛い痛い！ やめてください！ 頭を足でグリグリしないでくださいー！」

「そりいえば工機さん大丈夫かな？」

完全に安心しきつているのかゆづくりと歩いてる戒と円ちゃんに聞いてみたが一人は顔を見合わせ言つた。

「茂さんも援護しに行つただろ？ し大丈夫だろ。一人とも変だけど。

「そうそ、父さんもそれなりに強いしな。一人とも変けど。」

一人して同じような事を言い切つたことに疑問を覚えたがどうせ知る機会はないだろ？……。

………… 知る機会あつたよ。

私達が工機さんと別れた場所にたどり着くと一人して変と言つた理由がわかつた。

「ははは、なぜ逃げるんです？ 今から楽しいお仕置きタイムだと言ひのに！」

「だから私は男にお仕置きされて喜ぶような趣味はないんですって！」

「またまた、そんな冗談言わなくていいのですよ？」

「しかも毎度のごとくあなたは人の話を聞けませんよね！？」

「あなたも昔から私に弄られて喜んでいるじゃないですか」

「む、昔は昔です！ というか今は喜んでいませんーー！」

篠山さん……こんなキャラだったんだ……。

私が呆然と立ち尽くしていると左右から戒と円ちゃんが聞いた。

「な？ 変だろ？」

「な？ 変やう？」

「…………」

一方工機さんは私達に気づいたのか助けを求めるような顔で急速に迫ってきて、

「おお！ 瑞璃さん！ 戒君！ 巽！ お願ひですかから私を茂から  
助けてください……」

「えつと……」

私が反応に困つてこむとこつの間にか工機さんの隣にいた戒と巽  
ちゃんが工機さんの両腕を掴み、

「まあ工機さん、いつものことだから諦めてください」

「まあお父さん、こつものことやから諦めや～」

「酷い！ 鬼！ 悪魔！ セめて私の人権を……ヒツー！」

一人が工機さんを捕まえている間に茂さんが近づいてきて工機さ  
んの服の襟を掴み、

「や、行きますよ」

「だから痛いのはいやなんですって……」

「そうですか、そうですか」

「ひつ……あつ……だから痛いって……せつわ」

そのまま去つていった……。

「とつあえず社長室で待つてよひや～。ビツセ戻つてくるな！や」  
やわらじ

「そうだな」

「…………うそ」

巽ちゃんの先導で私達は社長室に行き待つこと一時間弱で茂さん  
と工機さんが入ってきた。

茂さんがつやつやとして工機さんがゲッソリとしてこるので  
びことなく嬉しそうなのは見間違いだろつか……。

「さて、工機」

「『『ベイメン』』の」とですね？」

「……ですがですね、びつせ私の質問の内容もわかつてこむのでし  
ょよ」

「ええ、とは言つてもあなたも私の回答がわかつてこむでしょつか  
「そうですね」

「それならなぜ聞いたなんですか？」

「彼等にも直接伝えたほうがいいと思いまして」

茂さんは私達を見て言つた。

「そうですね……」

そして工機さんも……円ちゃんを見てから言つた。

「私、仁王 工機は今仁王コーポレーションの社長として『ベイメント』との戦争に関し一切の協力をしないことを宣言します」

工機さんが言つた言葉に私達は呆気に取られていたが一番意外な人物が最初に口を開いた。

「なんでやー！ なんで一切の協力ができるへんねん！」

それは円ちゃんだつた。

円ちゃんは必死に言葉を投げかけるが工機さんはその言葉に少しも動搖せずに言葉を返していく。

「考えて見なさい円、iji 最近この街は度々の襲撃を受けているでしょう？」

「それはやうやけど……でも… 物資の支援ぐらには……」

「無理です、この街以外にも『ベイメント』に襲撃されている所は少なくないのです。私はこの地域の支配者として襲撃を受けたところの復興作業を第一として考えなければならないのです」

「でも……、うちらが倒せば……」

「十五年前、あれだけの人がいてツートップを失つてなお『ベイメント』は活動を続けています。それを完全に倒そうなど夢幻にすぎません。」

その言葉に反論する言葉がないのか円ちゃんはなにも言えなかつた。

だが工機さんは無情にも残酷な言葉を言つた。

「そして円、あなたが行くのならあなたは今から私の娘ではなくただの仁王 円です」

「…………」

その言葉に円ちゃんは今にも泣きそつた顔で下を向き唇を噛み締めた。

める。

篠山さんは「いつなる」とがわかつてていたのか平然とした顔で座つている。

私は講義の声を上げよつとしたが……私はまだ工機さんのことを探解していなかつた。

「ただし……」

私が上げよつとした講義の声は工機さんの上げた声によつてせえぎられ、工機さんは話を再開させる。

「『バイメント』を完全に倒し帰つてくることができたら今から旅出つ仁王 田はまた私の娘となります。」

「え？」

よくわからないといつた顔で工機さんは見上げた田井さんに工機さんは視線の高さをあわせ、「

「ですので、無事に帰つてきてくださいね？」

「お父さん……」

そして工機さんは立ち上がり照れくわいひに誰に言ひでもなく、「

「ああ……」の会社の十周年を記念して私の娘と同じ前年の仁王田と並び子に特別になにかを送るキャンペーンでもしましょうかね

……

「お父さん……」

「うわひと……危ないですよ？」

「だつて……えへへ……」

少しひつくりしながらも田井さんは抱えていた工機さんとその腕の中で心底嬉しそうに微笑む田井さん。

本当にいい親子だなあ……と思つた。

「やついえば茂さんはいつなる」とわかつてたんですか？」

「ええ、あいつのことですから」

「ならなんで教えてくれなかつたんですか？」

「だつて、黙つてた方が面白いぢやないですか」

「……

「やつぱ茂さんか……」

本当にサドなんだなあ……と思つた。

あの後工機さんの中でも円ちゃんが眠つて困つたようにしてたり、武器のメンテナンスをしたり、工機さんが篠山さんに夜通し弄られ続けたりして一夜過ぎで私達は今正門にいた。

「それでは、瑠璃さん、戒君氣をつけてください。」

「ありがとうございます」

「俺なら大丈夫ですよ!」

「茂? 円を頼みましたからね?」

「ええ、あなたこそこの地域の統治。がんばってください」

「円……無事に帰つてくれることを信じますよ」

「うん! 行つて来るで!」

「それでは……宮ノ坂 瑠璃様、荒尾 戒様、篠山 茂様、仁王

円様。旅の『武運を祈つています。』

『フォーデビルズ』からけつじつ歩いたといひで篠山さんの発案でちょうどいい高原で野宿をすることにした。

そして円ちゃんが寝てしまつたので三人で寝ずの番をすることにして私が寝ずの番をしている時だつた。

「円ちゃん?」

円ちゃんが少しふらふらしながら歩いてくる」とは疑問に思つけど、ま、大丈夫かな? 転んだり……。

「うにゃあ! ?」

したなあ……。しかも妙な声まで上げて……。

けど転んだ以上ほおつておけないので私は円ちゃんに近寄つて聞いてみた。

「大丈夫? 円ちゃん」

「うん! ありがとひづ、瑠璃おねえちゃん……」

「……え?」

今……田ちゃん私のこと瑠璃おねえちゃんって呼んだ?

「田ちゃん、もう一回呴つてみて?」

「あつがとつ、瑠璃おねえちゃん……」

「もう一回」

「ありがとつ、瑠璃おねえちゃん……」

「うん……悪いかも」

私は今壮絶に顔が緩んでるんだから。

「瑠璃おねえちゃん、私は寝に行くけど瑠璃おねえちゃんはいいわ  
るの?」

「私は寝ずの番をしてるからここに残るよ」

「そりなんだ……だつたら私もおねえちゃんと一緒に寝かの番する  
やつ……」

「え? 寝なくて大丈夫なの?」

「だつて瑠璃おねえちゃんと一緒に居たいんだもん……だめ?」

田ちゃんが少し潤んだような目で私を上田遣いに見て聞いてくる

「じゅあ一緒にじよつか」

「うん! 瑠璃おねえちゃん大好き!」

やうして私達は一緒に寝ずの番をしていたのだが田ちゃんが寝て

しまった私は、

「もしかしてこれが篠山さんが言つてこた田ちゃんが元に戻るまで

……?」

「うん……」このことは私の胸の奥にしまつておけ。田ちゃんの為  
に……。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7297m/>

---

ブレイブ・ウィル

2010年10月8日13時39分発行